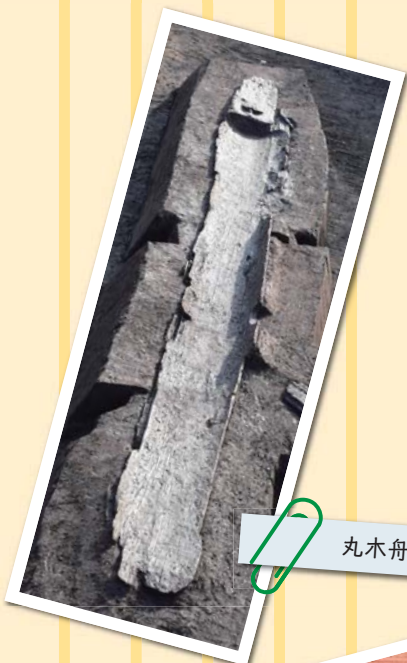


房総の文化財

VOL.58



丸木舟

蔵骨器を納めた墓跡



有段式住居跡



鹿角製装身具



遺跡見学会風景



緑釉陶器の獣脚



●【遺跡紹介】 圏央道の遺跡

姿を現した縄文時代の舟（横芝光町高谷川低地遺跡）

縄文時代の不思議な住居（香取郡多古町木戸台遺跡）

古代の墓と集落（香取郡多古町大塚台遺跡）

●【遺跡見学会紹介】 横芝光町高谷川低地遺跡

●【2019年度出土遺物公開事業のお知らせ】 「eco生活事始め」



首都圏中央連絡自動車道（略称：圏央道、大栄～横芝）建設に伴って調査が行われる遺跡は36遺跡に及び、成田市、山武市、多古町、芝山町、横芝光町の2市3町にまたがっています。現在までに27遺跡の調査が行われ、多くの成果が得られました。

今回は、高谷川低地遺跡、木戸台遺跡、大塚台遺跡の3遺跡について紹介します。



姿を現した縄文時代の舟

高谷川低地遺跡は、栗山川低地遺跡群の一つで、太平洋に注ぐ栗山川の支流である高谷川の両岸に広がる水田下の遺跡です。平成27年度から開始されたこの遺跡の調査では、縄文時代の泥炭層が高谷川流域に広く堆積していることがわかり、縄文時代後期中頃～晩期の木製品や土器などがその中から見つかっています。

丸木舟は、平成29年度の調査で水田の直下から発見されました。船首にあたる舟の舳先^{へさき}とみられる尖った部分と船体が確認されましたが、反対側の船尾に当たる舳^{とも}の部分は破損して失われていることが分かりました。舳先部分には丸い突起状の作り出しがあり、ユニークな装飾が施されているようです。現状では、長さ6.39mあり、舳の部分が残っていれば7m近くの大きさだった可能性があります。

丸木舟が使われた時期は、縄文時代後期後半～晩期前半（約3,500年前～3,000年前）の頃と考えられます。



高谷川低地遺跡の位置



丸木舟全景



舳先



儀仗形木製品

舟とは別の地点から発見された「儀仗形木製品^{ぎじょうがた}」です。どのように使われたかは不明ですが、先端部に精巧な加工が施されており、日常生活ではなく、何らかの儀式の際に使用されたものと思われます。



基本土層

高谷川低地遺跡見学会

遺跡見学会は、当財団の普及事業の一環として実施しています。

今回の遺跡見学会は、縄文時代の丸木舟が発見された横芝光町谷台に所在する高谷川低地遺跡を会場に、平成31年2月2日（土）に開催しました。

参加者は、出土した丸木舟を間近に見ながら、職員の説明を熱心に聞いていました。また、出土したばかりの土器や木製品、植物遺存体などの遺物を見学し、多くの質問も飛び交い、大変好評でした。

当日は、前々日に降った雪の影響もあって、足下がぬかるんでいる状況にもかかわらず、139名もの多くの見学者がこの遺跡を訪れました。



木戸台遺跡

高谷川低地遺跡

BC(紀元前)

旧石器時代

縄文時代

弥生

約30,000年前

約12,000年前

約2,300年前

紹介 の遺跡

香取郡 多古町木戸台 遺跡

縄文時代の不思議な住居

木戸台遺跡は、高谷川から南西にのびる小さな谷に面した台地上にあります。今から約60年前に学術目的で小規模な発掘調査が行われた、縄文時代中期の木戸台貝塚が含まれる遺跡としてその名が知られています。

昨年度から続く調査によって、縄文時代中期の竪穴住居跡3軒、貯蔵穴17基、人骨を伴う土壌墓1基などのほか、古墳時代の竪穴住居跡2軒が発見されています。

来年度以降も発掘調査は続きますので、木戸台遺跡に住んだ縄文時代の人々の生活のようすが次第に明らかになることでしょう。



木戸台遺跡の位置



有段式住居跡

縄文時代中期の竪穴住居跡の中には、「有段式住居跡」と呼ばれる不思議な竪穴住居跡が見つっています。住居の平面形は楕円形ですが、周辺部の床を残し、中央部が方形に深く掘り込まれた段差のある二段目の床が作られています。二段目の床の四隅には上屋を支えた柱の穴があり、炉の跡は見つかりません。この住居が使われなくなった後に堆積した土には、当時の人々が食料としたチョウセンハマグリやダンベイキサゴなどを主とした貝殻が少しだけ混じる貝層が残されていました。これらの貝は、外洋に面した砂地の潮間帯（潮が満ちて海面が最も高くなる位置と最も低くなる位置の間にある帯状の部分）から水深5m～30mまでの間に生息した種類であることから、この頃に姿を現し始めた九十九里浜から採集されたものと考えられます。



有段式住居跡の貝出土状況



鹿角製装身具出土状況



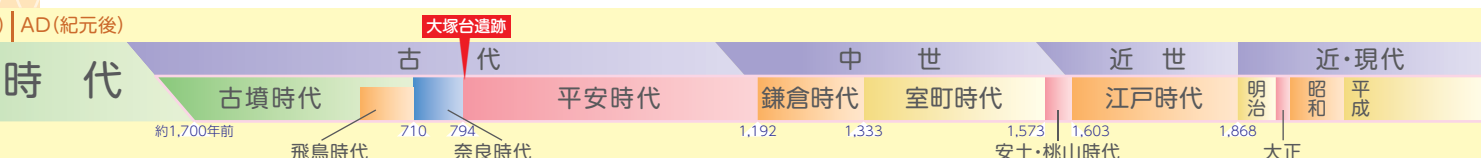
鹿角製装身具

有段式住居跡の堆積土の中から、鹿角を素材とした製品が見つっています。欠けている部分がありますが、残存部の長さは約2cmです。鹿角の基の部分あるいは途中の枝分かかれした部分を縦に割って素材としたことが、下端側面の湾曲や、裏面に認められる骨髓の海綿状組織からわかります。製作の順番は、垂れ下げ用の丸い穴を開け、表面の凹凸や裏面の荒れを研磨して整えた後に、表面には先端を細く尖らせた工具（鹿角や動物の骨が素材？）によって刺突を加えた列点状の装飾が施されています。全体の形が不明のため、製品名の特定は難しいですが、垂れ下げて用いた装身具と考えています。



貯蔵穴

左の写真は、使われなくなった貯蔵穴に捨てられた大量の縄文土器です。この貯蔵穴は、径約1.8m×1.5mの楕円形で、深さは約0.6mあります。底面から半分の深さまで土で埋め戻された後に焼土と炭化物が捨てられ、さらにその範囲を覆うように土器が捨てられています。縄文土器は、東関東系の加曽利EⅠ式が主体ですが、文様の一部に東北地方南部に分布する大木8b式の影響が認められるなど、地域間の交流を伺うことができます。



香取郡
多古町大塚台
遺跡

古代の墓と集落

大塚台遺跡は、太平洋に注ぐ栗山川の支流である多古橋川を望む台地上に位置し、平成28年度から調査が継続されています。今年度実施した調査地点は台地先端部で、縄文時代の炉穴6基・土坑6基、奈良・平安時代の竪穴住居跡10軒・蔵骨器を納めた墓跡4基などが発見されました。



遺跡全景



大塚台遺跡の位置



SX004

蔵骨器を納めた墓跡



SX001

この遺跡で注目されるのは、火葬した骨を納めた蔵骨器の発見です。蔵骨器を伴う4基の墓跡は、台地先端部に集中しています。骨を納めた容器の本体は土師器の甕、蓋には土師器の杯を利用し、周りには炭が確認されています。蔵骨器の年代は、8世紀後半～9世紀初頭頃と考えられます。

『続日本紀』によれば、文武天皇4（700）年3月10日条に、「天下の火葬此より始れり」と書かれた僧道昭の火葬の記録があるように、仏教の葬法である火葬がこの頃から採用されたようです。奈良時代に入ると、房総半島にも火葬の風習が伝わっています。多古町周辺は、蔵骨器の発見が多い地域として知られており、圏央道で昨年度調査された水戸塚ノ後2号塚の下から蔵骨器を納めた墓跡が1基見つかっています。



奈良・平安時代の集落は、調査範囲全体に広がっていますが、柱穴を持たない小さな竪穴住居跡で占められています。集落としては一般的なものですが、注目される遺物が発見されました。それは、竪穴住居跡から出土した緑釉陶器の獣脚と、「佛」と書かれた墨書土器です。「佛」は文字通り仏教との関連が考えられます。一方、獣脚は脚の部分が見つかったのみで、本体は不明ですが、ほかの例と比較すると、主に仏事に用いられる香炉のような役割をもつ「火舎」となる可能性が高いと思われます。2個見つかった獣脚は別個体のものとなります。「佛」は一般の集落でもみられますが、火舎と思われる緑釉陶器は、寺院や役所などの限定された施設で使われることがほとんどであり、今回の出土例はきわめて珍しいものです。



獣脚出土竪穴住居跡



獣脚出土状況



墨書土器「佛」



緑釉陶器の獣脚

2019年度出土遺物公開事業のお知らせ

テーマ

eco生活事始め

この事業は、当財団が実施した埋蔵文化財の発掘調査で出土した考古資料の有効活用を図るため、旧石器時代から中・近世の歴史上・学術上価値の高い資料を公開し、広く県民が埋蔵文化財に対する理解を深めることを目的として実施しています。今回は、旧石器時代から中・近世までの資料の中から、限られた資源を再利用して、無駄使いをなるべくなくすように工夫したことが分かる主な遺物を展示し、先人の知恵や技術等の一端を紹介します。

【展示会場と期間】

- 千葉県立房総のむら風土記の丘資料館
2019年8月3日(土)～9月23日(月・祝)
- 松戸市立博物館
2019年10月5日(土)～11月24日(日)
- 袖ヶ浦市郷土博物館
2020年1月11日(土)～3月1日(日)

【講演会】

- 袖ヶ浦市市民会館大ホール 2020年2月8日(土)

【講座】

- 松戸市立博物館 展示期間中に1回開催